
gradge

クロイ名無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

gradage

【Zコード】

N7487Z

【作者名】

クロイ名無

【あらすじ】

主人公の深峰快は特に変わったところのない高校生春、高校2年生になつた日、友達の西又良や幼馴染の天野桜などと話していると文通の話になり、快も文通を始めることに初めて早々『グラッジ』と名乗る人物と文通をすることにしかし、数日後に届いたグラッジからの奇妙なメールで快の人生は大きく変わる

恋愛、ホラー、推理（？）、いろいろ混ざった（混ざってしまった）

新ジャンル（？） 小説

小説＆まんが投稿屋にて連載済み

始まりのメール～序章～

TO グラッジ From

春は出会いの季節だと友達から聞いたことがある。確かに、入学式やら進級などで出会いは必然と増えるだろう。卒業式を言えば別れの季節だが……まあ、そこは気にしないでおこう。とりあえず、春は出会いの季節だ。君と会えたのも何かの縁だと思つて、仲良くしていきたいと思う。よろしく

俺はパソコンに簡単に文を打ち、送信相手へのメールアドレスが間違つていなかを確認して送信ボタンを押した。

「ふう。流石に初めてのことってのは緊張するな。」

俺は椅子の背もたれに体重を預けながら、一息ついた。そのときにはもう、画面に『送信完了』と表示されており、引き返せないところへ来ているのだと実感できた。

「しかし、いくらなんでも俺までマジでやるとは思わなかつたな。」

俺は自分に呆れながら昨日のことを思い出した。昨日は始業式で、数週間ぶりにクラスの人と会つた。春休みということで、会わない期間は短いので、誰もそこまで変わつていなかつた。メールで話したりしていったので、直接は会つていなくても自然と話せる。その時に出てきた話題が【文通】。文通と聞いたときは「これまた古風なことを」と思ったが、実際は少し違つて、ただ単に専用のメールアドレスを作り、ネットに晒す。そして文通をして欲しいという内容を書き、そのメール宛に来た最初のメールの人と文通みたいにメールをし合おうというのだ。もちろん、晒すサイトはちゃんと友人のサイトで、注意として送るどどうなるかは書いてあった。俺は反対したが、皆がその話にのつたこともあって、その日からスタートしたのだ。そして、その日の夜、さっそく俺の元にメールがやつてきた。名前は『グラッジ』と書かれていて名前からは男か女かは分からぬ。内容は簡単なもので、挨拶だけで終わつていた。

「…………さて、そろそろ学校へ行く用意でもしとくか。」

俺は電源を落とし、立ち上がった。俺は狭い部屋の端にあるクローゼットやタンスから服を取り出し、着替えた。脱いだ服は綺麗にたたみ、タンスの中へ入れると、1階へ降りていった。

「あ、快君。おはようございます。」

1階へ降りると、幼馴染の天野 桜が椅子に座つてご飯を食べていた。昔から勝手に入つて（合鍵渡したのは俺だけど）勝手に食べているので、問題はない。長い黒色の髪にはウェーブがかかっていて、その髪は腰より少し上まで伸びていた。顔立ちはスッキリしていて、美少女と言えるほどの容姿。おまけに背が少し低いので、学校では人気者（マスク戻し的意味を多く含む）の幼馴染だ。ただもう一つ、この幼馴染の左手がないことも、有名な理由だ。他にも背中に、大きな火傷の跡があるが……まあ、知つてるのは俺ぐらいだ。

「快君は朝、どうします？」

「え？ あ……どうしようか……。」

桜のこと気に取られていて返事が変になつてしまつたが、なんとか気づかれなかつたと思つ。」

しかし、朝か……。基本的に俺はあまり食べ物を食べない。とうより、食べられない。特に調理したものが駄目だつたりする。なぜ駄目なのか。それはよく分からぬけど、なぜだか体が拒否する。空腹が限界近くまでくれば食べられるが、基本的に食べようとすれば吐いてしまう。無理をすればなんとかなるが、両親が出張中ので、無理に食べる必要はあまりない。俺が食べないと両親が心配するから、その時のために体力は温存しておこう。……まあ、ただ食べたくない言い訳だけど。

「いや、いいや。」

「そうですか。」

桜はそう言つと、片手で器用にご飯を食べ、立ち上がつた。そのまま歩いていき、桜は食器を流しに置き、日曜大工が趣味の父が、桜のために付けた、食器を固定するものに固定して、食器を洗つた

「じゃあ、いきましょうか。」

朝なうえに桜は小食なので、さっさと食器を洗うと、カバンを持ち一緒に玄関を出た。昔から小・中・高と同じ学校へ通っているので、一緒に登校するのが普通になつていて。中学の頃は冷やかされたりしたが、俺も桜……は赤くなつて恥ずかしがつていたが、俺のほうは特に気にならなかつたので、いつも一緒に登校していった。桜自信も、恥ずかしがつても、毎朝俺の家まで來ていたので、本当に、単純に恥ずかしかつただけなのだろう。

「そう言えば快君。昨日、西又君と話して いた文通のことなんですか？」

『西又君』とは、例の文通の提案者であり、本名は『西又 良』。楽しいこと一番を信念とさえしている奴である。現に、付き合いはそこまで長いほうではないが、今までに法律違反をギリギリで避けている感じだ。……つまり、解釈の仕方によつては法律違反をしているのだ。本人は、警察に捕まつたりしない限り無罪だと主張しているが、実際にはギリギリである。

「ああ。一応な。昨日の夜に來たんだ。」

「へえ。こいつてはなんなんですが、変な人ですね。」「変? どういふこと?」

「あちらも専用のメールアドレスかもしだせんが、それでも見ず知らずの人にアドレスを教えて連絡の仕合をしようとしてきたからですよ。」

確かにそう言われば変な人だ。とりあえず、俺だつたらメールは送らない。相当暇をしていたら別だが、それなら見ず知らずの人と連絡を取り合つより、友達にメールをした方が楽だし、楽しい。「それで結局のところ、その文通は何をするんですか?」

「何つて……普通に世間話をするだけだけど?」

「なんなんですか? 私、文通をやつたことがなくて、どんなことをするのか気になつていたんですよ。」

実は、桜は携帯すら持つていない。今の時代、なくては不便とま

ではないものの、持っていないのは珍しいが、本人が必要ないと言っているので置つてないらしい。

「特に特別なことをする気はないな。良なんかは相手が女性だったから会いたいって言つてたけど」

「快君も、もし近所に住んでいたら、一緒に出かけたりしないんですか？」

「ん~……どうだらう。」

「そうですか。……ところで、話は変わりますが、数日後にこの町の神社でお祭りがあるのは知つてますか？」

「祭り？」

「祭りなんてあつただらうか？春祭り？……いや、ないだろ

「なんでも、ある国の首相さんの奥さんの生まれがこの町のようで、その首相さんと奥さんが数日前からこの町に来てるらしいんです。それで、出国前にお祭りをするらしいですよ。」

「へえ~。……それで、桜はその祭りに行くのか？」

「すみません。私はその日は用があるので、いけないんです」

「そうか。なら俺も家にいるか。良と男2人で回るなんて悲しいだけだからな」

その後も、なんでもない雑談が続き、登校した。俺と桜は一緒にクラスなので、教室へ行き、席へ着いた。

「よう。誰かからメールは来たか？一応、お前以外に聞いたが、誰も来てないそうだ。」

席に着くと、さつきの話に出てきた西又 良が現れた。長身で、ボサボサな髪。元々の顔はいいはずなのに、性格ゆえにヘラヘラした顔になり、一部の女子に『残念なイケメン』と呼ばれている男。楽しいこと一番という性格を除けば、明るいし、義理堅いし、頭はいいしで、むしろその性格を除ければモテモテだろうと想像できる。昔本人に言つてみたが、『無理無理。この性格は直らないって。それに、俺はそこまでイケメンじゃないって。』と返された。

「俺の所には昨日の夜メールが来たぞ。」

「何ー? マジかー。どんな奴だ!」

俺が言つと、良は顔を思いつきり近づけてそう尋ねてきた。……

「どうでもいいが、顔が近い。

「ああ。グラッジって名前の人から

「グラッジ?名前からして男っぽいな。」

「でも、偽名だろ? 俺だつて だし」

ついでに言つと、元々は快という名前だから『カイ』にでもしようかと思ったが、『かい』で変換してみると、ギリシャ文字で『』があつたので、そつちにした。

「まあ、そうだけど、女性で『グラッジ』なんて付ける奴いるか? 好きな歌手とかそういうのなら分かるけど、そんな奴は聞いたことないしな。」

楽しいこと一番とこつことで、女性方面の雑誌などすら読む良が言つながら、ほとんど間違はないだろう。

「桜ちゃんも聞いたことないだろ?」

「..... そうですね。聞いたことがないですね.....。」

桜は少し考へると、そう答えた。そう答えたところでチャイムが鳴つてしまい、そこで会話は終了し、良も席へ戻つた。担任が何か言つているが、聞き流す。そして重要なことではないだろう。朝の担任の報告を真面目に聞く奴など、桜や良以外にはいないだろうしな。

むしろ、重要なのはこの後だ。この学校、特に進学校でもないどころか、授業自体、真面目にやる教師がないのに、始業式の次の日から通常授業がある。しかも、今日は金曜日で、明日からまた休みなのに授業があるなど、無駄過ぎる気がする。面倒なこと極まりない。

何気ない日常

「ふ〜。流石に久しぶりの授業はキツイな」
授業が終わると伸びをしながらそう言つ。特に誰かに言つたわけではないが、隣の席が桜なので、何かしらの返事はしてくれるだろう。

「そうですね。」

言葉ではそう言つているが、桜は笑つてそう言つし、本人にはほとんど疲れが見られない。まあ、桜の場合は体型を維持するための運動以外はほとんどしないし、そこまで疲れるようなことをしている記憶がないので、『疲れている』という状態自体を見たことがほとんどないんだが。

「どうか、なんでそんなにも平氣そうなんだ?」

「春休みにも勉強はしてましたので。」

「へ〜。……とは言つても、春休みなんて短い休みに、宿題以外をやる物好きなんて、桜以外にいないだろ?」

「いいえ、そんなことはないですよ? 春休みにたまに図書室へ行っていましたけど、大抵、西又君がいましたから。」

「あ〜…… アイツも例外だな。アイツはお前みたいに勉強したくてしてゐわけじゃないから。」

良の場合、昔から「とりあえず勉強ができれば、犯罪以外なら何やってもいい」と親から言われ続けていたらしく、結果として、学年主席を楽々維持し続ける頭脳の持ち主となつた。桜も努力しているのだが、今まで一度も良に勝てたことがない。とはいっても、良とはいつもギリギリ負けてるレベルだし、3位の人との差が大きい。中の中の成績の俺からしたら十分過ぎる

「それでも努力を続けられるのは凄いことだと思いますよ?」

まあ、確かにそうだ。俺だったら、そんなことぐらいじやあ動かない。そりやあ、学年主席を取るたびに100万円やるとか言われ

れば別だが、基本、放任主義な両親なので（とこより、出張ばかりの両親との記憶より桜との記憶の方がが多い気がする）、良のような条件では動く気にはならない。

「まあ、とにかく、俺には休日の勉強は無理ってことだ。」

桜は「そうですか」と言ひ、「それでは帰りましょうか」と言い、立ち上がったので、俺も立ち上がった。

俺の家と桜の家は方角は同じだが、特別近いわけでもなければ、遠いわけでもない。まあ、歩いて5分ほどだろうが、住宅地なので当然だ。俺と桜は幼馴染だと思うし、周囲もそう言ひているので別に問題ないのだが、特に家が隣同士で子供の頃から兄妹のように育つた、なんてことはない。出会ったのが小学校入学前と言ひ、早い時期だったので、自然と一緒にいる時間が多かつただけだ。その頃から下校は一緒にしているので、今日も一緒だ。登校の方は小学校の頃からだつたはずだけど、なぜかは覚えてない。別にビリでもいいだろ？

俺は家に帰ると、さっそくパソコンを起動した。相手がどこの誰だかは分からぬけど、もしメールが着ているなら早めに返した方がいいだろ？と思つたからだ。……まあ、そんなマメなことをやるのも最初の内だけだろう。そう思いメールを確認してみると、メールが1つ来ていた。

TO From グラシジ

確かに、春は出会いの季節だと思う。……でも、出会いがいいものかは分からぬ。出会いわなければよかつた出会いもある。重要なのは、出会いつて、どう発展させるかだと思ひ。だから自分は、出会いを探す前に、今までのことを振り返つてみたい。

……内容はとりあえず理解できるが、まさかそんな返事が来るとは思つていなかつた。他人がどういう考え方を持とうが、興味はないけれど『春は出会いの季節』なんて言つたのは良で、ただ単純にメールを書くときに思い出したから書いただけだ。俺自身は、このあとに簡単な自己紹介でもするのかと思つたけど、相手はそうは思つ

てないみたいだ。……さて、どう返せばいいのだろうか？急に話題を変更させるわけにもいかないし、かといって俺は春にそこまで関心があるわけではない。過去を振り返る気もないし、これから先の未来……例えば明日にでも、可愛い転校生が来る展開などを想像しても仕方ないと思う。第一、転校生が来たとして、俺の人生にはほとんど関わらないと思う。桜と一緒に「転校生なんて珍しいな」とか言つたりして、少し話題にするだけで、すぐにどうでもよくなると思う。だから、自然と返信する内容なんて、適当に共感した振りをするか、反対の意見を書くしかないと思う。

俺は心中で『春は出会いの季節』なんてことを言つた良を恨みながら、メールの新規作成ボタンを押して、文章を書き始めた。

To グラッジ From

確かに、出会わなければよかつたと思う出会いもあつたけれど、自分はそこまで悪い出会いがなかつたせいか、やはり出会いが欲しいと思う。悪い出会いも良い出会いも、出会いがなければ起こらないことだから、それが良い出会いであることを信じて、出会いを待ちたい

パソコンにそう入力し終え、送信ボタンを押した。一応、俺の本心を書いたけれど、果たしてこれでよかつたのかは分からぬ。別に気軽にメールする感じでいいのだろうけど、なにぶん、相手がどんな人か分からぬので、どう書けばいいのが分からぬ。良や桜相手の方がどれだけ楽かがよく分かる。さつきも考えたことと同じだけれど、俺は別に本気で出会いが欲しいわけじゃない。今ま、適当に高校生活をして、もしかしたら良や桜とは違う大学かもしれないけど、とりあえず大学に行つて、就職。飛び切り良い人じやなくても、悪くない人と結婚して、子供を作る。そしてゆっくり老衰。そんな感じの人生でいいと思ってる。むしろその方がいい。死ぬまで特に大きな変化のない生活でいいと思っている。悔やむ過去も無く、未来に希望を持つでもない、平凡な人生。初めのメールであんなことを書かなければ、おそらく、さつきのメールでも、『

出会いなんて興味ない』と書いたと思う。俺は時計を確認し、とりあえずの寝る時間を決め、ゲームを始めた。

始まりのメール～警告～

起きると畳前だった。まだ春休みのダラダラした生活が抜けないのか、目覚ましをセットしていなかつたからなのか、昨日寝たのはまだ早い時間だったのに、畳まで寝てしまつた。別に用事などはないし、親もいないのでいつまで寝ていても問題はないのだけ……流石に畳までというのはどうかと思う。

俺はベットから出てカーテンを開けた。外は当然のように明るくて、結構暖かい。再びカーテンを閉め、せつせつと着替えて、カーテンをもう一度開け、下に降りる。昨日は朝、畳はもちもん、夜さえも食べなかつたので、今なら少しは食べられると思う。

1階に降りると、当然のように誰もいない。両親が出張に出始めたころは違和感があつたけど、流石に慣れている。むしろ、もしかしたら、両親が帰ってきて、両親がいる方が違和感を感じるかもしない。

俺は冷蔵庫を開け、中を確認してみた。パツと見た感じ、すぐに食べられるのがイチゴ、ヨーグルト、チーズ、ワインナー。生でいいなら野菜。調理が必要なのが魚と肉。ご飯は炊いておいた記憶はない……というか、使い方が分からないので、あるわけがない。冷蔵庫を閉めて、戸棚を開けると、ツナの缶詰が一つ。

……どうしよう。そこまで食べる気はしないとはい、流石に駄目な気がする。空腹自体は問題ないのだが、ヨーグルトやチーズでは、『食べた気分』というのが満たされない。俺にとつて重要なのは、『食べた』という満足感だからな。結局は『もう食べられない』という状態までは食べれないのだから、食べたという気分だけは持ちたい。……と、なれば一番いいのは魚か肉。……だが、俺に調理はできない。桜を呼ぶという手もあるけど、それは避けたい。こんなことで呼ぶのはどうかと思うし、向こうも迷惑だろ？

仕方ないのでツナの缶詰を取り出し、チーズとワインナーも一緒

に食べた。食べ終わると缶詰などの後始末をして、財布を持って外出した。夜はいらないにしても、明日の朝はたぶん、腹が減つているだろうから何か買っておかないとまずい。選択としては弁当かパン。せつき肉か魚を食べたいと思つていたためか、異様に何か食べたい。まあ、何かと言えば肉を食べたいんだけど。

歩いて10分ほどの所にあるコンビニに入ると、意外な人物を見つけた。

「よお、良じやないか。何してるんだ？」

雑誌売り場で立ち読みをしていた良に近づきながら、声をかけた。「おお、快か。お前」」やどうしたんだ？お前がコンビニに来るなんて珍しいじやないか。」

確かにそうだ。普段から料理は親か桜がやる（ほとんどの場合が桜だけ）ため、出かけること自体が珍しい。例え出かけることがあつたとしても、それは桜と一緒にというのが多い。主な理由……というか、一緒に出かける理由の100%が荷物持ちだけど。まあ、その食材の5割ほどは俺の家の冷蔵庫に入るので、文句は言わないけど。

「俺は明日の朝……いや、昼かもしれないし、夜かもしれないけど、とりあえず明日の飯を買いに来た。」

「ん？お前の両親が出張中というのは聞いたが、桜ちゃんが作ってくれるんじやないのか？」

確かに、あの甲斐甲斐しい幼馴染は、春休みの間も毎日飯を用意してくれた。朝来て、いつでも暖めれば食べられる物を作り、冷蔵庫に入れていた。だから、春休み中、俺は外でなくて済んでいたのだ。……まあ、結果としてそれはいいのか悪いのかは分からぬけどな。

「今日は来なかつたんだよ。起きたのもつゝせつきで、食べたものもツナ缶1つにヨーグルトとチーズだけ。明日はそんなことがないようにと思ってな。」

「どうか、1日をそれだけで生きていくのか？」

良が不思議そうに見てくるが、俺は平然と頷く。確かに、常人ならちょっと無理だろうけど、俺にとつて常人の『腹が減った』というレベルはまだまだ大丈夫なレベルなのだ。ろくに食べる物がない生活をしている人にとっての『餓死する』より少し前のレベル辺りじゃないと、俺にとつての腹が減ったにはならないのだ。そりゃあ、昔は常人の『腹が減った』で何度も食べようとしていたけど、そのたびに吐くので、今ではもうその感覚すらなくなつた。食べられる状態になつても『あ、そろそろ食べないと』というような感じしかしない。昔はその感覚が分からなくて倒れたこともあつた。

「で、お前こそ何してんだ？ 雑誌の立ち読みなんて珍しいんじゃないか？」

聞いた話だけど、コイツはチェックすべき雑誌は全て買つているらしいので、立ち読みなんてすることは思えない。……まあ、買うという時点で、こいつの所持金と毎月の小遣いがいつたいいいくらのかとかが気になるけど。

「別に大した理由はないんだが、ちょっと妹がこの雑誌の話をしていてな。」

「へへ、妹がいたんだ。」

「コイツの妹と聞くと、どうしても変なイメージしか出てこない。なんというか……顔立ちとかは真面目そうで、成績はいいのに、天真爛漫な女の子。良自身、最低限の身だしなみは気にするらしいが、家では髪を梳かすなどしないらしいので、妹の方もボサボサの髪で……うん、切るのも面倒だからという理由で凄く長い髪とかしてそう。身長以上の長さがあつて、学校に行くときは括つたりして誤魔化してそう。

そんな俺の想像を知るはずもない良は、その先を説明してきた。

「妹の年代……俺たちより2年下なんだが、その年代でこの雑誌が流行つているらしい。」

良がそういう、こちらに見せた雑誌を見せてみると、単なる女性用のファッション雑誌だった。

「あれ？ 前に良が話してた方は流行ってないのか？」

俺は前に良が話していた雑誌を記憶を頼りに探し、取つてみた。

「ああ、そいうらしいんだ。なんでも、そっちの雑誌よりもこっちの雑誌の方が服が可愛いだと。」

「へ～。」

俺は良から雑誌を借りて2つを見比べてみたが……全く分からない。どっちも同じような気がする。そりやあ、微妙な差はあるけど、どっちも可愛い気がするし、正直、どっちでもいい気がする。

「良は……分かるのか？ この差が。」

「いや、認めるのは少し癪だが、分からない。」

「そうか。」

今まで、いろいろな雑誌を読んできた良が分からないというのは意外だが、それだけに、この雑誌の感覚は女性特有なのだというのが分かる。

「まさか俺に理解できない感覚があるとはな。世界は広い。」

高校2年生の時に痛感するものとしてはどつかと思つのはさておき、とりあえず俺はもう話すことはないので、弁当を買い、良に別れを言つて、コンビニを出た。

この辺りには特に娛樂はない。少なくとも、電車に乗らないとゲームセンターなんてものはないし、本屋すらない。電車に乗らずに行ける場所といえば学校かコンビニかスーパーぐらいなものだ。それでも日常生活には困らないので、滅多に電車に乗つたりしない。俺はさつさと家に帰り、冷蔵庫の中に弁当を入れた。賞味期限は明後日なので、明日、万が一桜が来て飯を作つてくれたとしても、明後日の夜にでも食べればいいだろつ。

俺は2階へ上がり、パソコンを付けた。昨日メールしたのが夜なので、たぶんメールが来ていると思つたからだ。

TO From グラッジ

自分にはよかつた出会いなんてなかつた。出会つた人、ほぼ全員が殺したい人だつた。友達は勿論、両親さえ、なぜ自分を産んだの

かと恨んだ。だから、出会いを探す前に、定期的に過去を振り返り、自業自得だと思わない、誰かを殺しそうだった。

俺は内容を読んで驚いた。……だけど、すぐにその驚きはなくなつた。

つては、結構こういうことがあるということを知つていたからだ。日常生活では口に出せない欲求、不満、怒り、嫉妬。でも、ネット上では簡単に出せる。俺は樂観的に考え、とりあえず慰め……というより、なだめの文を書こうと新規作成ボタンを押そうとして気づいた。もう一つ、メールが着ていた。現在、俺のこのメールアドレスを知っているのはグラッジ一人のはず。なぜこちらが返信する前に送つたのだろうと不思議に思いながら、そのメールを開いた

TO From NO NAME

今、私は貴方とグラッジが2日まえ、の夜に始めて貴方にメールをしたことしか知らない人、グラッジは明日から人を殺す。が、回数は6回つ、いに最後に死ぬのは快誰か止めてこ、のは人を殺、人す、る。本、當に天、に祈る、お、父、さんお母さん救、つて。病、院、院、へ来てさ、あす、ぐに。人、へ、ル、

そんな文が書かれていた。……正直、意味が分からぬ。なんなのだろう、このメールは。差出人は『NO NAME』。つまり未登録。グラッジではない。間違いメールということはないだろう。文の中に『グラッジ』という人物の名前があることから、少なくともグラッジと知り合い。更に、俺の名前さえ出ている。……これは誰なんだ？それに、変な文の区切り方。今じゃあ使われてるのか分からぬよな、『の前か後を繋げると正しい文になる古い暗号かと思つたけど、紙に書いて試してみても』今えがつこ殺す本天るお父救病院さあすヘル』か『私の回いの人の當にお父さつ院へあぐル』になつて、おかしい。じゃあ、この区切りはなんだ？途中から文がおかしいことからも、明らかに無理矢理何かメッセージを作るために繋げたとしか思えないのに。……まあ、考えても仕方がない。どうせ俺には関係ないだろう。俺の名前が出ているけど、

変換ミスか何かだろ？」、グラッジの弟か妹が悪戯で送ったのだろう。

俺は適当に前の文の返事を書き、メールを送った後、適当にパソコン用のゲームをやったり、宿題をやったりして時間を潰した。

始まりのメール～予告～

起きたときにはまた毎前だった。昨夜、ムキになつてマイインスイーパーの中級のタイムを縮めようと、4時ぐらいまでやつていたのが駄目だったのだろう。

俺は起き上がり、着替えて下に降りた。下は昨日と同じように静かで、冷蔵庫の中には昨日買つておいた弁当があるだけだった。もしかしたら、桜は一度来たのかもしれないけど、冷蔵庫に弁当があるのを見て、飯を作るのをやめたのかもしれない。アイツ、来ても絶対に起こしてくれないからなあ。

俺はレンジで弁当を適当に温めて食べた。

……さて、これからどうしようか。明日の飯……は、とりあえず桜が作つてくれると思う。だから、コンビニに弁当を買いに行く必要はない。

……仕方ない。メールでもチェックして、またゲームでもするか。一応、冗談だとは思うけど、昨日のグラッジのメールも気になるしそう決めて立ち上がり、2階へ上がつた。メール画面を開いてみると、予想通りにメールが1つ来ていた。

TO From グラッジ

始まるのは6時。1日1回。最後の6回目に貴方。

最初は地獄の炎が身を焼き、その体は一度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によつて、灰になる。

次は連續殺人、殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知つている人。さあさあ次に死ぬのは10人。

3つ目。後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思うなら、その頭を下げ過去を悔い改め、罪を償え。

4つ目。泥棒は物を盗むだけ。強盗はもっと大切なものを取つつく。まあ氣をつけて、今度は死神が貴方の命を取りに来るよ

5つ目だ。ゴールは近い。早く見つけて、ご覧。奪う命はあと2つ。次は裏切り者、連帶者。お金は大切。でも、絶対のものではない。お金に眩んだその日はいらない日

最後に貴方。永遠に感じられる日も終わりが来る。さあ、貴方の元へ参ります

それだけだつた。ただ、なんとなく予想できることは、本当に人を殺すつもりなら6時に行い、最初の殺し方は焼いて殺す。そして2回目には10人死ぬ。そして最後には俺……だと思つ。分かるのはそれぐらいなもの。……でも、もし本当に殺すつもりなら、なぜこんなメールを送るのだろうか？漫画とかアニメで予告状を出す怪盗や殺し屋がいるが、そんなのは話を面白くするためにするだけ。実際にそんなことをしても、メリットは何もないはず……。まあ、單なる冗談にそこまで真剣に考えても仕方ない。

そう結論して、メール画面を閉じ、ゲームを起動した。メールの返信を忘れていたことを途中で思い出したが、正直、どうでもよくなっていた。

始まり

「……………朝か。」

アラームの音で目が覚め、時間を確認すると、当然のようにセイツトした時間が目に入った。今日からまた学校なので、起きなことマズイ。俺は体を起こし、制服に着替えて下に降りた。

「……………あれ？ 桜は来てないんだ。」

1階がやけに静かだと思ったけど、まさか桜が来てないとは思わなかつた。桜が来ない日なんて、日直で行くのが早い日ぐらいだし、それでも前日にはちゃんと書つのに……。

ちょっとと考えたけど、特に理由が分からなかつたので、仕方ないので考えるのはあきらめた。どうせ学校へ行けば会えるだろう。学校に着くと、自分の席へ向かいながら、桜の姿を探した。自分の隣の桜の席。そこからグルツと教室内。しかし、ビニにも桜の姿はなかつた。すると、席にカバンを置くと同時に、良が話しかけてきた。

「よう。桜ちゃんは？」

「いや、知らん。まだ来てないのか？」

まだ来てないとなると、考えられる原因は……風邪……かな？でも、アイツの場合、食生活とか生活リズムがいいせいなのかもしれないが、そういうことは滅多にならない。

「快…………お前…………何か怒らせるとか言つたんじゃないか？良が俺を呆れるように見てくるが、その可能性はないと思つ。金曜日の時に話した内容なんて、特になんでもない世間話だし、別れるときも普通だつた。……まあ、体調が悪いのだろう。滅多にないとはいって、あくまでも『滅多にない』だからな。

良にそう言つと、良も納得したのか、「そうだな」と頷いた。

「……………やっぱ、昨日の火事だけどな。」

「火事？」

「昨日、火事などあつたのだろうか？昨日はそこまで早く寝た気はしないんだが……。深夜に起きたのか？」

「知らないのか？……あ、いや、すまん。そういえば、お前の場合、眠りが深いからな。一度寝たらなかなか起きなかつたな。」

良の言葉に、若干イラッとするが、事実なのでしょうがない。桜が俺を起こさないのもそれが原因だし。

「で？ そういうからには深夜に起きたんだよな？」

「ん？ ああ。深夜も深夜。3時頃、だつたかな。」

「そんな時間になんて火事が起きるんだよ。放火か？」
自分で言つておいてなんだが、それはないかとも思つた。ここ数年、事件らしい事件など、ここいらで聞いたことがない。火事など、俺が小学校の時以来だ。

「いや、たんなるタバコの火の不始末らしい。」

「へへ。で、その話がどうしたんだ？」

「いや。この火事なんだが、事故とテレビでも新聞でも言われてるんだが、どうもそんな気がしなくてな。」

「どうということだ？」

「まず、その家の主は一応、35歳の独身男性らしいんだ。」

「一応って？」

「ほとんど本人と分からぬほど体が焼けていたらしい。残った部分と、その家を買った人などを調べて判明したらしい。それでも、正直、『おそらく』といつレベルでの確証なほど焼けていたらしい。」

「ふうん。どうやって身元を判明させるのかは知らないけど、そんなにも焼けてるなんて、ある意味凄いな。…………ん？ でも、それでなんで事故じゃないと思うんだ？」

「周りの家に、一切被害がなかつたからだ。」

「でも、そんなことつて普通にあるんじゃないのか？ 人は中に入っているんだから。」

「ああ。だけど、被害がないということは、それだけ早く火は治まつたということだ。それだけの間に、そこまで焼けるには、そもそも本人に火を付ける以外、不可能だと思うんだ。」

「うーん……。」

確かに良の言いたいことは分かる。その家がどれだけ大きいかは分からぬし、発火場所も分からぬけど、少なくとも、火事になつていれば普通の人は寝ていても気がつく。おそらく、俺でも自分の家が燃えていれば気づくだろう。35歳ということを考えれば、むしろ窓を破つてでも逃げられたと思う。そう考えれば、確かに事故としてはおかしい。とはいっても、起こってるものは起こつてるので考えないといけない。35歳なんだから、酒を飲んでいたとかが考えられるし、持病を持っていたとも考えられる。他にも足を骨折していたとかでもいい。いくらでも可能性はある。

「まあ、こう言つたら死んだ人が可哀想だけど、俺たちが考えてもどうにもならないって。俺たちは探偵でもなんでもないんだから。」

俺がそう言つと、未だに悩んでいた良も「そうだな」とだけいい、席に戻つた。

俺はカバンの中を机に入れながら、桜のことを考えた。俺にひとつは火事より桜の方が大事だ。

金曜日は特に何もなかつたはずだから、土曜日……は、確かに起きて、昼にちょっと食べてそのままコンビニに行つて、良と話しただけ。桜の性格的に、朝起きなかつたからとかいう親的な怒りはないと考えれば、あとは部屋でダラダラ過ごしていただけだ。日曜日も昼に起きて、特に出かけるでもなく、パソコンをして……あれ? 何かが引っかかった。桜のこととは関係ない気がするけど、何かが引っかかる。なんだろ? ……?

気になつて、ずっと考えたけど、結局は答えは分からなかつた。

昼休みになると、俺は桜の家に電話してみた。

『プルルル！プルルル！プルルル！』

「……あれ？」

しかし、誰も受話器を取りらずに、そのまま留守番電話になつてしまつた。確かに、桜の父親は何をしているかは知らないけど、内職（それでも十分収入がいいらしい）なうえに、母親は専業主婦。桜は体調が悪いのかどうかは分からないうが、眞面目な桜が学校に来ないという事態なのだから、両親のどちらかが出かけるのであっても、どちらかが残るだろう。あの両親は桜を凄く可愛がつてるので、桜を置いて出かけることなど、月に一度のデートの日ぐらいだし……（それはそれで問題がある気がするけど）。可能性としては両親も桜も出かけているパターンだけど、これも可能性は低いかな。知り合いの葬式とかが急に入ったなら分かるけど、それならそれで俺に連絡ぐらい入れるだろう。…………さて、どうしたものか。とりあえず帰りに桜の家によつ……

『ブゥーン！ブゥーン！ブゥーン！』

突然、携帯が振動し始めた。マナーモードの解除がいちいち面倒なので、当然といえば当然なんだが。

ディスプレイで番号を確認してみると、ついさっき電話したばかりの桜の家の電話番号だった。俺はすぐに携帯を開いた。

「もしもし、桜か？」

番号は桜の家だったので、桜の両親という可能性もあつたが、そもそも桜の両親は俺の番号を知らない。もしかしたら、体調が悪い桜に代わって掛けてきた可能性もあるけど、桜の両親と電話で話したことなどないせいか（というか、桜や良以外と電話で話したことなどない）自然と桜と考えて対応してしまった。

『もしもし。私だよ。』

しかし、予想通り相手は桜だった。

「ああ。どうしたんだ？ さつき電話したけど、出なかつたじゃないか。」

『あ、『めんね。ちょっと忙しくて、出られなかつたの。』

……あれ？ また何か違和感が……。さつき、昨日のことを考えてたときにも何か引っかかつたけど、今度はまた、別のことで引っかかるような……。

「そ、そりが。で、どうしたんだ？」

『どうしたつて？』

「いや。今日、学校に来てないから、体調でも悪いのかと思って。」

『あ、うん。『めんね。ちょっと体調が悪くて。』

何か……何かが引っかかる。昨日のことで引っかかつたのは一瞬だけど、今はずっと引っかかつてる感じだ。声は明らかに桜のもの……だと思う。電話越しだから確信を持つて言える訳じゃがないけど、桜だと思う。というか、今回は向こうから電話をかけてきたのだから、桜のフリをする理由がない。

「そりが。じゃあ仕方ないな。早く元気になれよ。」

いくら考へても答えは分からないので、俺はさつさと会話を終わらせようとした。考へ事に集中しそぎて、体調が悪い桜に気を使わせたら悪いからな。

『うん。じゃあ、またね。』

『おう。…………ふう。』

向こうが電話を切る音がした後、俺の方も電話を切り、一息ついた。桜がとりあえずは元気だつたという安心感と、電話中に引っかつた違和感からの疲れがきた。なんで桜との電話でこんなにも疲れないと云いの？ と思つたけど、桜に当たつても仕方ない。

俺は考へ事をさつさと切り上げて、良の待つてゐる教室へ戻つた。アイツも桜のことを心配してゐたので、一応、元気だつたことは報告しないとな。

「おお、快。桜ちゃん、どうだつた？」

「元気そうだつたぞ。あれなら、明日は来るんじゃないかな？」

「そうか。それはよかつた。」

その後は、黙々と昼飯を食べた。基本的に何でも話せる良だが、それゆえに話を振ると深いところまで話せてしまつので、話を振るときは注意しないと、こつちがついていけなくなる（本人も自覚してはいるらしい）。だから、自然と良と付き合つ奴はあまり自分から良に話を振らない。それは俺も例外じゃないけど、それでも一緒に食べるのは、ただ単に俺に友達が少ないので、沈黙が苦痛じゃないことや、フツと浮かんだ何でもない話でも、ちやんと付き合つてくれるからだろう。

逃避

「じゃあ、俺は帰るぞ。」

帰りのHRが終わり、桜の様子を見に行くか行かないかを迷つていると、良は俺にそう告げて、さつさと帰つていった。まあ、良は桜や俺の家とは反対方向だから、お見舞いに行こうにも、結構な遠回りになるからな。桜が元気だと分かつた今、様子を行く必要もない。

……でだ。結局は行くか行かないか。電話越しでは、結構元気そうだったけど、俺に心配させないために元気そうに振舞つてたという可能性もある。でも、それならそれでお見舞いに行つて元気じゃないところを見られる方が桜は嫌だろう。しかし、俺としては桜の状態は知つておきたい。これで見に行かずに、明日桜がこなかつたら心配で心配で胃に穴が開きかねん。

そう決めた俺は、立ち上がり、教室を出た。とりあえず、お見舞いの品を買っていく……にはスーパーは逆方向なので、一旦家に帰つて、冷蔵庫にあつたと思うイチゴを持つて、桜の様子を見に行こう。

俺はさつむと歩き、校門を出て家に向かつた。家に帰ると冷蔵庫にイチゴがあることを確認して、一応、今からお見舞いに行くと連絡しようと思い、桜の家に電話してみた。

プルルル！プルルル！プルル、ガチャ

『もしもし？』

今度は昼のように切れることなく、桜が電話を取つた

「あ、桜か？快だ

『あれ？どうしたの？』

ううん……やっぱり違和感がある。なんだろう？

『もしもし？』

「あ、すまんすまん

今考えるのはやめとくが。今の桜にあまり心配をかけるわけにもいかないし。

『それで、どうしたの?』

「いや、これからお見舞いに行こうと思つてな。行つても大丈夫か?」

『え! ? 今から! ?』

桜の声は俺の予想に反して、なぜだか驚いた……とこりより、都合が悪いような声だつた。

「どうした? 駄目か?」

『駄目……つてわけじゃないけど……』

妙に歯切れが悪いな。普段なら良いか悪いかははつきり言つたのに……。そりやあ、付き合ひが長くても、桜も女の子なんだから、風邪の時に来られると困る理由はいくつか思いつくが、それを考へても、なぜそんな反応になるのかが分からぬ。もしかして、年頃の女性の感覚つて俺が思うより纖細なのか?

「いや、駄目なら駄目って言つてくれ。俺はただ、桜のことが心配だつただけだから。」

『あ、そりやあ。ありがと。でも、私は元気だよ?』

「お前の場合、我慢することだつてありえるだろ。」

『もう。そんなことないつて。』

「そうか?」

『うん。心配してくれてありがと。』

「じゃあ、明日は絶対に来いよ?』

『うん、分かつた。』

俺はその言葉を聞くと電話を切り、一息ついた。まだ嘘を付いていたという可能性もあつたけど、あそこまでしつこく聞いたので、その可能性もほとんどないと黙つていいだろ。もし明日また休んだら、今度こそ無理矢理押しかければいい。

俺はそう心に決め、自室へ荷物を持って上がつた。宿題があるが、とりあえずパソコンをつけると、インターネットに朝に良が黙つて

いた火事が大きく出ていた。簡単に読んでみたが、良が言っていたことと変わらなかつた。ただ、最後に、良が言つたように『明らかに焼け方がおかしい』と書かれていた。俺は良に感心しながら、メール画面を開いた。特に新着メールはなかつたが、開いた瞬間、良から話を聞いた時に感じた違和感に気がついた。昨日のグラッジからメール

『始まるのは6時。1日1回。最後の6回目に貴方。最初は地獄の炎が身を焼き、その体は一度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によつて、灰になる』

事件が起きたのは3時。書いてある時間より9時間も後だ。……でも、文章は確かに焼けて死ぬと書いてある。単なる偶然……にしてはタイミングがいい気がする。例えば、6時に始まるというの俺を騙す嘘という可能性もある。他にも犯人は別にいるけれど、何らかのことでの犯行が起こるのが6時だと知つた。けど、相手の事情で時間が変わつてしまつたとか……。もしくは、グラッジ本人が犯人だけ、グラッジの事情が変わつた可能性もある。それとも、やはりただの偶然か……。

「ああ！くそつ！」

俺は頭を思いっきり搔き、髪をグシャグシャにした。昔からイライラするとそうしてしまう癖がある。やめようと思つても、やはりやつてしまつ。……とにかく、考へてもきりがない。もう考えるのは諦めて、偶然ということにしよう。もし偶然じゃなかつた場合、あと4回殺人が起こつたあと俺は殺されるらしいが、今の時代、そつ簡単に人が殺されるということ自体がおかしい。俺も両親も特に偉い人じやないし、知り合いにもいない。だから、狙われる理由もない。だから、これは單なる偶然だ！

そう決め付けて、俺はゲームに没頭することにした

第2の犯行

今朝は田覚ましが鳴る前に起きたうえに、寝起きもよかつた。俺はいつも通りに着替え、下へ降りた。下へ降りてきたが、今日もまた、桜はいなかつた。まあ、おそらく、風邪が直つたばかりだから、念のため来なかつたのだろう。もしこれで学校にいなかつたら、今日こそ本当に家に押しかけるしかないな。俺は荷物を玄関に用意して、自室で漫画を読み、ちゅうどいいぐらいの時間になると、家を出た。

昨日と同じように1人で通学路を歩くが、やはり違和感がある。まあ、それも今日までだらうとその新鮮な気分を味わいながら歩いた。

学校に着くと、妙に学校内が騒がしかつた。

「ねえ、聞いた？ 昨日の事件」「昨日の夜、校舎やグラウンドにあつた不思議な液体の跡だろ？」「そうそ。先生たちも、初めは理科の先生が何かの薬品を落としたんだろうって言つてたけど、昨日の放課後は理科の先生、夜残つてなかつたらしいよ？」「俺が聞いた噂によると、あれ、血らしいぜ？」「うそーーなんで学校にそんな跡があるのよ。」「知らねえよ。それがあくまで噂だよ。」

歩いてるだけで聞こえる内容でも、物騒なワードが聞こえる。こういうときは、さつさと教室に向かうべきだな。悪い内容にしろ、単なる勘違いにしろ、良なら情報が早いだらうし、良自身の考えが聞けるからな。

教室に入ると、すぐに良がやつてきた。

「学校中騒いでるから知ってると思うけど、朝、校舎やグラウンドに血の跡があつたんだ。」

なんとなくそりぢやないかと思つていたが、良が断言するとは思わなかつた。

「なんで血だつて分かるんだ？」

「第一発見者が俺だからだ。」

良は普段から学校に来るのが早くて、いつも教室で予習をしている。だから、その跡も発見できたのだろう。

「でも、なんで血なんて分かつたんだ?」

「当たり前だろ? いくらなんでも、学校内に血と間違えるような液体は置いてない。少し見れば分かる。」

確かにそうだ。実際、どのくらいの跡かは分からぬが、血の跡なら普通は分かる。

「……で、なんの血かは分かつたのか? 誰か死んだのか?」

一瞬、思いついたのが桜。桜はまだ来ていない。風邪だから、来るのが多少遅いかもしれないし、やはり悪化して家にいるのかもしないが、それでも心配だ。

「まだ分かつてないけど、俺が見つけただけでも5箇所、血の跡があつたんだ。もしかしたら他にもあつたのかもしれないし、5箇所に血の跡があつたからといって、被害者が5人とは限らない。」

良も桜を思い浮かべたのか、少し落ち着きがなかつた。だけど、逆に俺は落ち着いていた。昨日とは違い、すぐに思いついた

「もしかしたら、血の跡は10箇所あるのかもしれない。」

「……どういふことだ?」

落ち着かずにはずきつづいていた良だが、俺がそう言つと、瞬間、怖い目つきになつて俺を見た。

「前に、グラッジという人とメールをしているつて言つただろ?」

「ああ。あの文通か。まだ続いてるのか?」

「いや、続いてるつて言つかは分からぬけど、最後のメールに気になることが書かれてるんだ。」

「気になること?」

説明するより見せたほうが早いと思い、携帯を取り出して、パソコンのメールボックスを開いて、そのメールを見せた。

To From グラッジ

始まるのは6時。1日1回。最後の6回目に貴方。

最初は地獄の炎が身を焼き、その体は一度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によつて、灰になる。

次は連續殺人、殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知っている人。さあさあ次に死ぬのは10人。

3つ目。後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思うなら、その頭を下げ過去を悔い改め、罪を償え。

4つ目。泥棒は物を盗むだけ。強盗はもつと大切なものを取つていく。まあ気をつけて、今度は死神が貴方の命を取りに来るよ
5つ目だ。ゴールは近い。早く見つけてご覧。奪う命はあと2つ。次は裏切り者。お金は大切。でも、絶対のものではない。お金に眩んだその目はいらぬ目

最後に貴方。永遠に感じられる日も終わりが来る。さあ、貴方の元へ参ります
確信はもてないけど、おそらく間違いない。

『近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知っている人。』

学校の人なら、近いとも近くないとも言える。それに知つていても知つていないとも言える。

「昨日の火事も時間はともかく、内容は一致してゐる。」

「……確かにそうだけど、問題は快の言つように時間だ。今回は分からぬけど、昨日の火事は深夜3時だ。9時間の差がある。」

良も俺と同じ考え方のようで、悩んでいる。もしこの内容が本当なら、明日にはまた誰かが死ぬ。次は今までのようになんかは書いてないが、何か後ろめたいことがある人。つまり、何か犯罪を犯した人だと思う。

「良。次のことを考える前に、まず今回と前回のことを考えよう。」

次のことを考えていると顔に出ていたのか、良はそう言い、一文指差しながら確かめた。

「まず昨日の火事。時間は置いておくとして『地獄の炎が身を焼き、その体は一度と動くことはなくなる』。」

「これはそのままの意味で、丸焦げになつて発見されただろ?」

「ああ。次は『自らが招いた炎によつて、灰になる』。」

「これは……灰とまではいかなくても、誰か分からぬほどに焼けてたんだろ?」

「ああ。じゃあ、一つ目は正しいってことか。」

もう既にこの時点で、俺も良もこの文が全てこれから起ることなどということをなんとなく予感している。でも、そうでなくて欲しいと思いながら、次を確かめる。

「『続殺人、殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知っている人。さあさあ次に死ぬのは10人』。」

「まだ10人死んだかは分からぬし、血の跡も分かつてるので5箇所だな。」

「……つまり、これで残り5箇所が見つかって、死んだのも10人だと分かつたら……」

良は最後まで口にしなかつたが、お互に分かつてている。……いや、この結果が出る以前に、今の時点で、この文が本物だと分かつている。

「じゃあ、次は今日のやつか。」

「ああ、そうだな。」

「『後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思つなら、その頭を下げ過去を悔い改め、罪を償え』。」

「良……意味、分かるか?」

「よくは分からぬけど、おそらく、犯罪を犯した人だ。でも、捕まつていない人だな。」

「なんで捕まつてない人なんだ?」

途中までは俺と同じだったが、良は『捕まつてない人』と断言した。

「グラッジ自身も、わざわざ刑務所に入つて殺すわけがないから、対象が犯罪者だと仮定すると、まだ捕まつてないか、釈放されたかだ。だけど、文の後半に『過去を悔い改め、償え』て書いてある。釈放されたからといって悔い改めてるとは限らないが、償えつてことはまだ償つてないつて事だ。だから、たぶん捕まつてない人だ。」

「なら、余計に探すのは無理じゃないか。」

まだその犯行を止めると決めたわけじゃないが、誰かが死ぬと分かつてゐるのに、みすみす見逃すようなことはしたくない。でも、警察でも捜しきれていない人を探すことなんてできるわけがない。

「いや、そつとは限らない。例え犯罪を犯していても、犯罪が起つたことを知られていなければ捕まることはない。」

良のいうことはもつともだ。……でも

「なら、なんでグラッジはそいつが犯罪を犯したことを見つけているんだ？」

「それは……」

良もそれを考えていいなかつたのか、すぐには答えられず、考え込む。可能性としては、対象が犯罪者ではないということだけ、他に考えられない。ここまでストレートに書かれていたのに対し、いきなり趣向を凝らした文にするとは思えない。

キーン！ コーン！ カーン！ コーン！

しかし、そこでチャイムが鳴つてしまい、考えは中断させるしかなくなつてしまつた。

……けど、それはちょうどよかつたかもしれない。今は考えることが多くて、頭がいっぱいだ。桜は無事なのか？ グラッジの目的は？ 殺されたとしたら次に殺されるのは誰？

頭の中で考えるが、余計分からなくなる。先生が何か言つているが、それも右から左に抜けていく

「え、皆も知つてていると思うが、この学校の至る所に血の跡があつた。」

たまたま聞こえた先生のその言葉に、クラスの人は

「あ、やっぱり血の跡だつたんだ」「ねえねえ。じゃあ誰か死んだの?」「いや、死んだとは限らねえだろ」「でも、怪我はしたつてことでしょ?」「案外、動物の血かもよ?」

皆、好き勝手に喋りだした。俺としても、動物の血であつてほしいし、例え人のものだつたとしても、怪我で済んでいてほしい。「血については警察の方が調べてくれているが、とりあえず、念のために今日の欠席の家庭には連絡するように職員会議で決まった。今日の欠席は……天野と増田か。誰かすぐに連絡が取れる人はいるか?」

俺はすかさず手を挙げた。桜は携帯を持つていないので、直接家に電話をかけることになるが、とにかく一刻も早く無事を確認したかった。

「じゃあ深峰。天野にはお前が連絡を取れ。他のクラスもホームルーム中だから、あまり大きな声で話すなよ。」

俺は先生の注意を聞き流しながら、早足で廊下に出て、携帯の電話帳から桜の家の電話番号を見つけ、ボタンを押した

プルルルル！プルルルル！プルルルル！

……でない。いくら待つても、誰も出なかつた。時間を見てみると、携帯電話の時計は8時45分と表示されている。この時間なら、少なくとも両親のどちらかは起きているはずだ。なのに、なぜ誰も出ないんだ?

ついには留守番電話の声が聞こえてきて、焦りが増す。俺はすぐにもう一度桜の家に電話をかけた。

プルルルル！プルルルル！プルルルル！

（頼む桜。出でくれ）

心の中でそう願いうも、また留守番電話の声が聞こえてくる。

俺は急いで教室に戻り、先生に早退をしたいと言つた。

「だが、まだ何かあつたと決まつたわけじゃあ……」

「そんな！お願いします。早退させてください！」

俺は先生に頭を下げる、そうお願いした。もし、ただ単に寝坊し

て寝ていただけなら『よかつた』で終わる話だ。でも、もし何かあつたなら、探すなり何なりしないといけない。こうして話している間にも桜がヤバイかもしれないと、落ち着いてなどいられない。

そしてとうとう、未だに迷っている先生に向かって、「すみません」と叫んで教室を飛び出した。後ろからは先生が俺を呼ぶ声が聞こえるが、そんなものは無視して走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7487z/>

gradge

2011年12月31日18時53分発行